

神奈川・黒岩祐治知事を襲った慢性硬膜下血腫

風呂で転倒し、頭打撲 時間差で発症の恐怖

神奈川県黒岩祐治知事（71）が2月3日、慢性硬膜下血腫で入院、4日に手術を受けて12日に退院しました。大みそかに露天風呂で転倒し、後頭部を打撲したことが原因とSNSで明かしています。なぜ1カ月以上も後に発症したのでしょうか。

脳はやわらかく衝撃に弱い組織のため、頭蓋骨に覆われているだけでなく、頭蓋骨直下から順に「硬膜」「くも膜」、脳表面の「軟膜」と3枚の脳膜で覆われています。しかも、くも膜と軟膜の間には脳脊髄液があり、クッションのように脳を保護しています。

転倒や交通事故などで頭部を打撲し、硬膜下の血管が破綻し、血液がたまる状態を「硬膜下血腫」といいます。強い衝撃で比較的太い血管が損傷され、激しい頭痛や意識消失などで受傷直後に発症するのが急性硬膜下血腫です。一方、軽微な打撲などで細い静脈が傷つき、その時には症状がなく、1～2カ月後にふらつきや物忘れなどで発症するのが慢性硬膜下血腫です。

元気に自立した生活を送っていた80歳男性のAさんは、2カ月前に転倒して床で頭を打ちました。意識消失や頭痛もなく、打ったところに少し痛みがあるくらいです。家族の勧めですぐに救急外来を受診し、頭部CTを撮りましたが、異常はありません。

ところが、最近になって歩行がぎこちなく、物忘れがひどく認知力も低下傾向です。徐々に進行し、心配になった家族はAさんを連れて脳神経外科を受診しました。右手と右足の不全麻痺（まひ）を認め、CTで左の頭蓋骨直下に三日月状の血腫を認めます。ただちに入院して局所麻酔下に穿頭（せんとう）血腫ドレナージ術を受けました。術直後から症状は改善し、今は元通りの生活にもどりました。

■症状は頭痛、物忘れ、手足の麻痺…

慢性硬膜下血腫は高齢化で増加しています。発症率は最近30年間で約2倍になり、10万人当たり年間20～40人です。70～80代の発症が多く、女性より男性に多い病気です。発症リスクを高めるのは高齢以外に、アルコール多飲、抗凝固薬（血液サラサラの薬）の内服などがあります。

原因は頭部外傷です。本人が忘れてしまうほど軽微な打撲のこともあります。時間がたって発生するメカニズムはよく分かっていませんが、最近では次のように考えられています。

頭部打撲などで非常に細い血管が損傷し小さい血腫ができます。血腫の周りに被膜が形成され、被膜に慢性炎症が起きると脆弱（ぜいじゃく）な新生血管が形成されます。この新生血管から血液成分が漏出し血腫が徐々に増大、1～3 カ月後、ある程度大きくなると脳を圧迫して発症する—と考えられています。

症状はさまざまで、頭痛や物忘れなど認知症の症状、手足の麻痺症状、ひどい場合は意識障害が起きます。治療は、症状があり脳が圧迫されている場合は、局所麻酔下に穿頭血腫ドレナージ術を行います。術後に血腫が再発することが 10～20%ほどあり、注意深いフォローが欠かせません。

再発した場合には硬膜動脈塞栓術といって、硬膜にいく血管を詰める治療を追加することがあります。症状がない場合や手術のリスクが高い場合は、慎重にフォローをするか、抗炎症作用のある薬、たとえばステロイドホルモンなどを内服します。